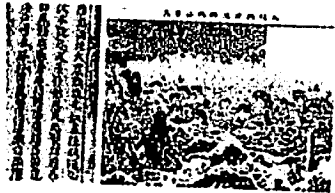


歴史学研究会編

震災・核災害の時代と歴史学

震災・核災害の時代と歴史学



歴史学

「3・11」後の歴史学のあり方を問う

書き下ろし論考・史資料を多数収録!

定価(本体2,400円+税) 青木書店

歴史学研究会編

青木書店



9784250212062



1923021024000

ISBN978-4-250-21206-2
C3021 V2400E

定価(本体2,400円+税)

青木書店

- I. 東日本大震災と歴史学: 災害と環境 ◆ 東日本大震災と歴史の見方 [平川 新] / 地殻・原発と歴史環境学 [保立道久] / 東日本大震災と前近代史研究 [矢田俊文] / 災害にみる救援の歴史 [北原糸子] / 尾崎山崎事件の歴史的意義 [小松 裕]
- II. 原発と歴史学: 「原子力」開拓の近代史 ◆ マンハッタン計画の現在 [平田光司] / 日本最初の原子力発電所の導入過程 [有馬哲夫] / 原発と原発にあこがれた岡義の心性 [加藤哲郎] / 原発と地域社会 [中嶋久人] / 原子力発電と差別の再生産 [石山徳子]
- III. 地域社会とメディア: 震災「復興」における歴史学の役割 ◆ 東日本大震災と歴史学 [奥村 弘] / 東日本大震災からの復興をまぐる二つの道 [岡田知弘] / 記録を創り、残すということ [三宅明正] / 首途の自由がメルトダウンするとき [安村直己] / 関東大震災朝鮮人出稼と向きあう [藤野裕子]
- IV. 史資料ネットワークによる取り組み ◆ 歴史遺産に未来を [佐藤大介] / 福島県における歴史資料保存活動の現状と課題 [阿部浩一] / 茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会(茨城史料ネット)の資料救出活動 [白井哲哉] / 長野県栄村における文化財保全活動と保全の理念 [白水 智]
- V. 資料編 ◆ 貞観十一年の震災と外寇 [石井正敏] / 自治体史のなかの原発 [棚井 仁]
- VI. 災害と歴史学ブックガイド ◆ 藤沼勇義「仙台平野の歴史津波」 / 峰岸純夫「中世 災害と戦乱の社会史」 / 山下文男「津波でんでんこ——近代日本の津波史」 / 吉村昭「三陸海岸大津波」 / 北原糸子「関東大震災の社会史」 / 藤田祐幸「知られざる原発被曝労働——ある青年の死を追って」 / 広瀬隆「原子力時限爆弾」 / 川村勝「福島原発人災記——安全神話を晒した人々」 / 日岡一雄・木野龍逸「検証 福島原発事故・記者会見——東電・政府は何を隠したのか」

震災・核災害の時代と歴史学

The Role of Historical Science
in the Face of Great Earthquakes and Nuclear Disaster
by REKISHIGAKU KENKYUKAI
AOKI SHOTEN Publishing, Co., Ltd.
ISBN978-4-250-21206-2

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製転載(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

二〇一二年三月二日、東北地方太平洋沖地震が発生、東日本大震災となった。これが引き金となる形で、東京電力福島第一原子力発電所では重大事故が発生し、炉心溶融（メルトダウン）という深刻な事態に立ち至った。これらの自然的・人的災害によって露呈された日本社会の脆弱性と、現在まで続く（そして今後も続くであろう）混乱は、私たち歴史学関係者にも大きな衝撃を与えている。

その衝撃は、大きくいって二つの問題に集約されよう。

ひとつは、従来の歴史学がもっぱら人間社会の発展史を関心の対象としていたこと、そしてその「人間社会」は、ともすれば自己完結的な存在であるかのように錯覚されていたということである。今回の大震災のような人間社会を大きく変容させる自然災害、自然現象をいかに歴史に組み込んでいくか、という問いは見過ごされてきた。災害史、環境史といった分野はすでに切り拓かれつつあったのではあるが、その成果が見逃されて来たことは否めない。戦後日本の歴史学運動はたまたま、大地震を経験せずに済んだ時代に展開してきたのである。一九九〇年代以降の「震災の時代」に、私たちは歴史研究者としてどのように向き合っていくべきなのだろうか。

ふたつめは、科学技術に対する過信ということである。核兵器によるヒロシマ・ナガサキの、そして第五福竜丸の悲劇を熟知していたはずであるにもかかわらず、私たちは「原子力」エネルギーの危険性に警鐘を鳴らすことに十分でなかった。それどころか、戦後日本において、「原子力」は明るい未来を象徴する科学技術としてさえ捉え

刊行にあたって

表紙オモテ・ウラの地紋

日本三代実録（国立国会図書館所蔵）

表紙ウラの写真（左上から時計回りで）

三陸大津浪惨状之実況（岩手県立博物館所蔵）

相馬市 2011年4月9日（中嶋久人撮影）

田石巻ハリストス正教会教会堂 2011年7月25日（佐藤美弥撮影）

経済産業省前の反原発デモ 2012年4月8日（中嶋久人撮影）

られていた。この幻想は今回の事故によって打ち砕かれたが、日本社会は、事態を根本的に打開する道に未だ踏み出してはいない。地誌列島に多くの原発が林立していることを考えれば、福島事故はほんの始まりにすぎず、今すぐ手を打たなければ、今後同様の事態が各地で生じることも予想される。私たちは、今後長く続くかもしれない、「核災害の時代」の入り口に立っているのである。

従来見落とされ、「三・一一」によって明らかとなったこれらの問題は、過去に学び、未来を展望する科学としての歴史学の存在意義を根底から揺さぶるものであるといえよう。

このような衝撃のなかで、歴史学研究会は、さまざまな議論・取り組みを行ってきた。震災で軽微ながら被害が出た結果、歴研の事務所も移転することを余儀なくされたが、その新事務所でも委員会が取り組んだ最初の仕事のひとつが、二〇一一年五月の大会に向けての総会決議案の作成である。委員会での議論、歴研ウェブサイトで決議案の公開、それに対する会員からの意見・批判の集約、といった手続きを踏み、大会当日の議論を経て、総会決議「三・一一」後の歴史学研究会の責務」が採択された。この決議では、(一)「災害をめぐる歴史研究の成果の社会への還元」に十分寄与して来られたかを自ら問い直し、世界的視野に立ちつつ、自然と人間の関係をめぐる歴史を多様な視点から明らかにすることに努め、その成果を会誌等を通じて広く社会に発信」すること、(二)「災害からの市民生活の再建と復興という課題と不可分の取り組みとして歴史資料等の教授や災害・復興記録を位置づけ、地域の歴史性を大切にしつつ関係諸団体と連携して活動を進めるとともに、……広く歴史学関係者に対して協力を呼びかける」こと、(三)「原発事故に関して」「これまでの取り組みが不十分だったことを反省するとともに、……歴史学の立場からの検証に努め」ること、(四)「政府・東電・専門家・マスコミ等による情報公開のあり方をめぐり、懸念すべき状況が生じていること」を指摘するとともに、情報の迅速かつ体系的な公表とすべての記録の保存・公開を通じて、問題解決への道を見出すべきであることが表明された。(全文は「歴史学研究」二〇一一年七月号に掲載)。

ついで、この総会決議を受けての具体的実践の一つとして、「歴史学研究」二〇一二年一〇月号で「緊急特集 東日本大震災・原発事故と歴史学」を組んだ。特集では総会決議での問題提起を継承・発展させる形で、(一)「地震史・災害史という分野の重要性を確認し、歴史学全体のなかに正当に位置づけ直すこと」、(二)「史料の保全・復元活動の重要性を確認し、課題を提示すること」、(三)「原発問題を歴史学の本格的な検討の対象に据えること」、(四)「同時代史・現代史研究の立場から今回の危機を記録・分析すること、をめざし、関連の諸論文と、各地の史料ネットワークから寄せられた論考・報告、さらに「史料・文献紹介」を掲載した。

本書は、この「緊急特集」の成果をさらに深め、また、より多角的なアプローチ、異なる視点からの分析をも試みて、発展させたものである。論考中一〇本は「緊急特集」掲載論文の再録であるが、特集原稿をベースとしつつ、論者により、その後の研究の進展や事態の展開も反映させた形で書き改められている。五本は新たに参加して頂いた論者による書き下ろし原稿である。「資料組」として、震災後あらためてその重要性が注目されるようになった、日本列島における過去の地震をめぐる記録の紹介・分析、また、原発をめぐる各地の自治体史における記述一覽等も掲載した。史料保全をめぐる各地の取り組みに関する報告も最近の展開を踏まえたものにアップデートされたほか、特集では取り上げられなかった地域の事例も新たに収録している。また、文献紹介も増補し、全体に構成を一新したものとなっている。

以下、本書の構成と各論考の内容を簡単に紹介しておこう。

第一部「東日本大震災と歴史学——災害と環境」には、地震を中心とした災害史を「三・一一」後の視座から検討する諸論考、さらにはより広い、環境史的な展開も展望する論考が収められている。平川新「東日本大震災と歴史の見方」は、九世紀に東北地方沿岸を襲った貞観津波、近世の慶長津波に着目し、過去の交通と災害との関係、

地域「復興」の歴史のあり方をめぐる問題提起を行い、また歴史資料保全の重要性を指摘している。保立道久「地産・原発と歴史環境学」は、古代の地産についての歴史研究がほとんどなかったことを指摘し、貞観地震と九世紀政治史の関係について論じている。さらに、戦後歴史学の営みにみられた「未発の契機」を掘り起こしている。矢田俊文「東日本大震災と前近代史研究」も貞観地震に着目する。九世紀史の再検討の必要性を指摘し、またそのために地質学と歴史学との協働の重要性を指摘している。北原糸子「災害にみる救援の歴史」は、安政大地震後の救済、関東大震災後の救援の状況、そして今回の地震後に見えてきた救援の新たな形について「災害ユートピア」をキーワードに論じている。小松裕「足尾銅山鉛毒事件の歴史的意義」は、足尾銅山鉛毒事件、チッソ水俣病事件、そして今回の原発事故と、繰り返される地域・環境をめぐる加害・被害の構図を指摘し、「進歩イデオロギー」の再検討を迫る。いずれも「三・一一」の経緯を踏まえ、災害・環境の観点から歴史研究の再構築をめざそうとするものである。

第II部「原発と歴史学——「原子力」開発の近代史」には、「原子力」開発をめぐる近代史に関する諸論考が収められている。平田光司「マンハッタン計画の現在」は、第二次大戦中に米国によって進められた原発開発のための巨大プロジェクトについて論じ、核兵器、「原子力」、素粒子物理学の歴史的な緊密性を明らかにして、それが現在直面する問題を指摘している。有馬哲夫「日本最初の原子力発電所の導入過程」は、日本最初の原発が英国から輸入される過程を新史料にもとづいて明らかにし、そこでのトラブルとメディア・コントロールによる隠蔽の事実を指摘している。加藤哲郎「占領下日本の「原子力」イメージ」は、占領期の新聞報道に着目し、占領中から「原子力の平和利用」に日本民衆のさまざまな「夢」が託されていた事実を明らかにしている。中嶋久人「原発と地域社会」は、なぜ需要地である大都市から遠く離れた福島という地域に原発が建設されたのかという問いに

対して、政府・東電の思惑、福島県や立地自治体による盛んな誘致、反対の声を抑える「安全神話」や電源交付金制度の存在について明らかにしている。石山徳子「原子力発電と差別の再生産」は、米国先住民居住地域に建設された原発の事例に着目し、政治的・地理的周縁に追いやられたマイノリティーに、みずからの意思とは無関係に米国のエネルギー政策の負の遺産が押しつけられている事実を具体的に示している。いずれも、「原子力」開発をめぐる国家・資本の側の動向、そして「原子力」をめぐる地域民衆の葛藤を論じたものといえよう。

第III部「地域社会とメディア——震災「復興」における歴史学の役割」には、震災後の現在、「復興」をめぐる声高な言説の前にかき消されがちな地域社会をめぐる問題や、震災後にならわなくなったマスメディアをめぐる問題に、歴史研究の立場から迫ろうとする諸論考が収められている。奥村弘「東日本大震災と歴史学」は、阪神・淡路大震災以来の歴史資料ネットワークの活動を踏まえて、歴史資料保全活動の課題と困難、災害の記憶を地域において継承していくことの重要性について論じている。岡田知弘「東日本大震災からの復興をめぐる二つの道」は、「三・一一」後の「復興」のありようをめぐる、地場産業を無視した「構造改革」が推進されようとしていること、「復興格差」が拡大していることを鋭く指摘し、「人間の復興」を提唱する。三宅明正「記録を削り、残すということ」は、同時代史研究者の立場から、「三・一一」の具体的経緯を記録し、過去の災害に関する記録の検閲から、災害の記憶の変容のあり方について論じている。安村直己「言論の自由がメルトダウンするとき」は、「朝日新聞」の紙面を検討し、原発と震災後の政局の報道の「客観性」のなかにある政治性を指摘し、マスメディアの問題点をあぶり出す。藤野裕子「関東大震災時の朝鮮人虐殺と向きあう」は、新史料を用いて、朝鮮人虐殺への政府・軍の直接的関与と加担した民衆の責任を明らかにし、災害時の公権力と共同性について論じている。いずれも、「三・一一」で一層あらわになった、現在日本における地域社会やマスメディアをめぐる問題に深く切り込んだ論考である。

第Ⅳ部「史資料ネットワークによる取り組み」には、宮城、福島、茨城、そして長野県栄村における史資料保全・復元活動をめぐる報告が収められている。保全活動に取り組んでいる方々のなかにも被災者があり、その被災状況や、震災後の困難な状態の中での活動の実態、そして今後の課題などが示されている。

第Ⅴ部は「資料編」である。石井正敏「貞観十一年の震災と外寇」は、第Ⅰ部をはじめ本書でもたびたびとりあげられる、九世紀に東日本沿岸を襲った大地震に関する史料の詳細な解説・分析である。棚井仁「自治体史のなかの原発」は、歴史学関係者が原発をどのようにとらえてきたのか、という問いへの一つの答えとして、原発立地自治体の自治体史における原発記述のあり方を調査したものである。

第Ⅵ部「災害と歴史学ブックガイド」には九本の文献紹介を収めた。「三・一一」後に刊行された新しい書籍だけでなく、以前から震災・核災害の問題に取り組んでいたにもかかわらず正当に位置づけられてこなかった仕事、また、狭義のアカデミズムの外にあるものも取り上げた。今後、震災・核災害の問題を考えていく際の、ひとつの手がかりとなれば幸いである。

本書の執筆者の中には、以前から地震史や災害史研究、史料保全活動等に自覚的に取り組んで来られ、「三・一一」後は修繕場のような忙しさとなつて、切迫した状況下で活動している方々が含まれている。逆に、これまで扱ってこなかった自然史や環境史、あるいは原発史といった分野に、「三・一一」後に意を決して分け入った執筆者もいる。さらには、狭義の歴史学ではなく隣接諸科学の専門ではあるが、現在の危機を克服するためにダイシブリンを超えた対話・協働が不可欠と考えて参加して下さった執筆者もある。困難で多忙な状況の中、参加を快諾し、強行軍の編集日程におつき合い下さった執筆者全員に心から感謝したい。

「震災・核災害の時代」と、私たちは、これからも長くつきあっていかなければならない。その意味で本書は、現時点での取り組みの一つの成果ではあるが、またほんの始まりにすぎない。歴史学研究会は、今後もこの問題に継続的に取り組んでいく。

なお、本書の編集には歴史学研究会委員会での決定を受け、佐藤美弥・太田亮吾・山本英貴・小田真裕・近藤祐介・福士純・高柳友彦・伊藤俊介をはじめとする編集チームがあったり、事務局の増田純江さんの全面的な協力を得て作業を進めた。文献紹介の執筆、表紙カバーや扉用の写真の選定作業などには、委員全員が協力した。青木書店のみなさん、續文堂出版の原嶋正司さんには大変お世話になった。記して感謝する。

二〇二二年五月

佐藤美弥（編集チーム代表）

刊行にあたって

I 東日本大震災と歴史学——災害と環境

東日本大震災と歴史の見方

地震・原発と歴史環境学——九世紀史研究の立場から

東日本大震災と前近代史研究

災害にみる救援の歴史——災害社会史の可能性

足尾銅山鉱毒事件の歴史的意義——足尾・水俣・福島をつないで考える

II 原発と歴史学——「原子力」開発の近現代史

マンハッタン計画の現在

日本最初の原子力発電所の導入過程

——イギリスエネルギー省文書「日本への原子力発電所の輸出」を中心に

占領下日本の「原子力」イメージ——原爆と原発にあこがれた両義的心性

原発と地域社会——福島第一原発事故の歴史的前提
原子力発電と差別の再生産——ミネソタ州ブレイリー・アイランド原子力発電所と先住民

III 地域社会とメディア——震災「復興」における歴史学の役割

東日本大震災と歴史学——歴史研究者として何ができるのか

東日本大震災からの復興をめぐる二つの道——「惨事乗型復興」か、「人間の復興」か
記録を創り、残すということ

言論の自由がメルトダウンするとき——原発事故をめぐる「官説」の政治経済学
関東大震災時の朝鮮人虐殺と向きあう——災害時の公権力と共同性をめぐって

IV 史資料ネットワークによる取り組み

被災地の歴史資料を守る——東日本大震災・宮城資料ネットの活動
福島県における歴史資料保存活動の現況と課題
茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会（茨城史料ネット）の資料救出活動
長野県栄村における文化財保全活動と保全の理念

佐藤大介 254
阿部浩一 265
白井哲哉 270
白水 智 275

平川 新 2
保立道久 22
矢田俊文 41
北原系子 51
小松 裕 65
加藤哲郎 131
有馬哲夫 100
平田光司 82

中嶋久人 117
石山徳子 161

奥村 弘 176
岡田知弘 193
三宅明正 209
安村直己 221
藤野裕子 239

- (33) 磯城根亮吉「水爆開発の歴史とあるべき水爆の姿——果たして現実の水爆は如何？」(一九六九年発表)、『磯城根亮吉記
念文集』一九八一年、九一―九三頁。
- (34) United Kingdom sales of atomic reactors to Japan. British Embassy in Tokyo. J.O. Moreton. December 24, 1968. Export
File2
- (35) Ide-Michela. October 30, 1969. Blewis-G.M.P. Myers. May 15, 1970. Department of Trade and Industry. S. Maeda. Oc-
tober 19, 1972. Export File2

占領下日本の「原子力」イメージ

——原爆と原発にあこがれた両義的心性

加藤 哲郎

1 ブランゲ文庫に見る占領期原爆・原子力報道

「安全神話」の背後にあった「占領期原爆報道の消滅」神話

二〇一一年三月の東日本大震災・福島原発事故は、筆者の専攻する政治学や歴史学にも、大きな課題を突きつけた。核兵器は取り上げてきたが、原発は研究の死角だった。

故高木仁三郎は、戦後日本を呪縛してきた「原子力は安全」など九つの神話を挙げた(『原子力神話からの解放』講談社文庫、二〇一二年)。これにならって筆者は、歴史的・政治的に構築された「原爆・原発神話」の検討を始めた。そして、「原子力の平和利用」を尊じた二〇の神話の一つとして、さしあたり「占領期原爆報道の消滅」を資料的に解析した。

そのさい念頭においていたのは、一九四五年九月二日GHQプレスコード以降の原爆報道の検証である。占領期については、「原子力問題」についての検閲はきびしく、もちろん広島、長崎の有様、原爆の残虐性など書くことは許されなかった時代(『武倉三男「はしがき」「続・弁証法の諸問題」理籙社、一九五五年)とされてきた。プレスコー

下以前の八月敗戦時は原爆報道が溢れていたのに、「占領が終わるまでは、マス・メディアによる原爆に関する報道は一切姿を消す」(柳井林三郎「原爆はいかに報道されたか」原爆体験を伝える会編「原爆から原爆まで——核セミナーの記録」上、アグネ、一九七五年)、「原爆報道をやろうと思えばできた時代だ」が「原爆報道はあまりなかった」(吉時朝日新聞記者・岩垂弘「報道に見る原爆と原爆」同前)とも述べられてきた。

ごく最近でも、福島原発事故以後の自社報道検証のなかで、「原爆が書けないことは記者のだれもが知っていた」(「朝日新聞」原爆とメディア——「平和利用」への道⑥)二〇一二年一月二日夕刊)と、「占領期原爆報道の消滅」が繰り返えされてきた。

検閲された原爆報道、検閲をくぐった原爆・原子力記事

確かに、占領軍による原爆被害・放射線被害についての報道統制と検閲については、モニカ・ブラウ「検閲一九四五—一九四九——禁じられた原爆報道」(時事通信社、一九八八年)、堀場清子「原爆表現と検閲——日本人はどう対応したか」(朝日選書、一九九五年)、笹本征男「米軍占領下の原爆調査——原爆被害国になった日本」(新幹社、一九九五年)、高橋博子「封印されたヒロシマ・ナガサキ——米核実験と民間防衛計画」(風風社、二〇〇八年)、紫沢敦子「原爆と検閲——アメリカ人記者たちが見た広島・長崎」(中公新書、二〇一〇年)など多くの研究がある。ここでは米軍批判は許されず、放射線被害、特に晩成被害、内部被曝の事実が検閲され報道できなかった事例が抽出され、分析された。

それに対して、実際に検閲され、検閲をくぐって報道された記事や論説についての研究は、ほとんど見られない。この側面は、占領期新聞・雑誌記事三〇〇万点を網羅するプランケ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」を管理・運営する早稲田大学二〇世紀メディア研究所の独壇場で、中川正美「原爆報道と検閲」(「インテリジェンス」

三号、二〇〇三年)、御代川貴久夫「占領期における「原子力の平和利用」をめぐる言説」(山本武利編「占領期文化をひらく」早稲田大学出版部、二〇〇六年、所収)、小野耕世「思い出の「原子力時代」」(「インテリジェンス」一一号、二〇一二年)などを送り出してきた。

とりわけ御代川論文は、二〇〇六年当時に入力されていた雑誌論文約二〇〇万点から、主として科学雑誌をとりあげ、早くから「原子力の平和利用」が語られ論じられてきたことを、明快に示した。したがって筆者は、その後に入力された西日本の新聞記事一〇〇万点分を補い、一九七五年の柳井・岩垂論文でバスされた一九四五年九月以降四九年末までの時期のメディア情報を直し、「占領期原爆報道の消滅」神話を再検討することにした。

その検証にあたって、筆者は、プランケ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」からキーワード検索で抽出した「原子」四三四九件、「原子爆弾」一四七四件、「原爆」一三八五件、「原子力」一五九三件をサンプルに用いた。キーワード検索の性格上別個な「ウラン」五三九、「アトム」二八八、「放射能」二一九、「ピカドン」九〇件もあわせて検討した。

原爆・原子力は国連・天皇・吉田茂なみに報道されていた

「原子」四三四九件は、歴史的現象でいうと「国連」「賠償」「復讐」などと並び、「天皇」や「終戦」のヒット数に近接する。普通名詞でいえば「広告」「失業」「理論」「進歩」「電話」「台風」なみで、人名でいえばトルーマン、マッカーサー以上の頻度である。

人名検索では「トルーマン」四〇二九、「マッカーサー」三九一七が最大で、日本人では「吉田茂」が一四二二二件である。戦後に「原爆・原子力」を解説し、「原子力の平和利用」を唱えた「専門家」は、ほとんど例外なく戦時日本の原爆開発の担い手であった。陸軍主導の東大・理研「二号計画」に仁科芳雄、磯崎根遠吉、武谷三男ら、

海軍がスポンサーの京大荒勝文策研究室「F号計画」に湯川秀樹、坂田昌一らが動員された。

占領期に「原爆」「原子力」を論じた核物理学者では、「湯川秀樹」(初代原子力委員会委員)一三四件はノーベル賞受賞報道を含む別格で、「武谷三男」一二八、「渡辺愨」(原子力宣言)八八、「仁科芳雄」六八、「崎川範行」六二、「磯根根達吉」(長岡半太郎五男)三七、「藤岡由夫」(初代原子力委員)三七、「伏見康治」三〇、「長岡半太郎」(日本学士院長)二三、「坂田昌一」一七、「朝水振一郎」一四、「茅誠司」一四、「武田栄一」一三、等々である。注目すべきはマルクス主義物理学者武谷三男で、雑誌論文での「原爆」「原子力」解説や新聞ニュース記事へのコメントが多い。社会科学の大内兵衛、山川均、蝦山政道なみ、有澤広巳、丸山誠男以上のメディア露出度であった。

2 「唯一の被爆国」でなぜ「ヒロシマからフクシマへ」の悲劇が?

出発点としての一九四五年一〇月、磯根根達吉「原子爆弾」

戦後の出発点におくべきは、磯根根達吉の単行本「原子爆弾」である。朝日新聞社から一九四五年一〇月に刊行された。米國マンハッタン計画は継続中で、日本では知られておらず、長崎型アルトニウム爆弾は想定されていない。しかし広島型ウラン原爆を解説し、「被害状況」を爆風・火傷・放射能について記す。ベストセラー「日米会話手帳」と同時期で、すでにプレスコードが存在するのに放射能被害についても触れ、半減期は短く「数ヶ月後には動植物には大して影響ない」としている。戦後の「人類への熱源の供給」を展望し、「大規模な原子核反応の研究」を要望する。「原子力の平和利用」論の端緒である。

磯根根達吉は、当時の日本学士院長・長岡半太郎の五男で、陸軍Ⅱ理研の「二号研究」で仁科芳雄の片腕だった。東大理学部教授で、サイクロトロンに詳しくかった。後にアメリカで中曾根康弘に原子力を教えた。占領軍に協力し

て日本の科学技術体制の民主化、日本学術会議創設に関わりながら、学術会議の第一回公選で落選したことが、後々までトラウマになった。一九四九年に「原子爆弾の話」(講談社)を出してアメリカに渡り、五六年帰国後、日本原子力研究所副理事長・産業計画会議委員・日本原子力発電副社長などを勤めた。

朝日新聞社の報道責任と田中慎次郎の役割

二〇一一年三月の福島原発事故を受けて、「朝日新聞」は同年一〇月から夕刊連載「原発とメディア——「平和利用」への道」で、自社報道を含むメディアの戦後を検証し始めた。だが不十分である。一九四一年創刊「科学朝日」は、最新兵器の特集が売り物だった。敗戦直前四五年七月号で「ウラニウム原子爆弾」が紹介された。そこに広島・長崎の原爆投下である。すると四五年九月号は早くも「原子エネルギーの利用——平和再建のために」と転身し、一一月号「原子爆弾の副産物」「原子機関車登場か」へと、あたかも敗戦などなかったかのごとくに「科学」の最先端を追う。磯根根達吉の啓蒙書は同社刊だった。

一九四六年一月二二日「朝日新聞」社説「原子力時代の形成」は二〇一一年一〇月二二日記事で検証されたが、一九四七年二月二九日にも社説「原子力の平和利用」がある。四八年二月二九日には「原子力に平和の用途」でさまざまな「夢」をかきたてた。「フクシマの悲劇」の地点からより深刻なのは、「ことも朝日」四七年一〇月号でのこともたちへの報道「平和に原子力、すばらしい威力を世界の幸福に利用」である。

後の原発導入との関わりで、CIAエージェント正力松太郎の「読売新聞」、日本テレビを動員したAtoms for Peaceキャンペーンが今日クローズアップされているが、「原発とメディアの責任」の考察においては、占領期の朝日新聞社報道の役割、その中心で、読売の正力に比べれば紳士的で学術的だった論説委員田中慎次郎の役割も見逃せない。三二件の論説・記事があり、他社メディアにも登場して米ソや国連での核管理問題を論じた。

雑誌・新聞では四五年九月から「原子力の平和利用」雑誌でも新聞でも、「原爆」「原子爆弾」報道は、外電を含め一九四五年九月からみられる。前述「科学朝日」四五年九月一日「原子エネルギーの利用——平和再建のために」が先駆で、研究社の「中学生」も「原子爆弾に鑑みる」を掲載する（四五年九月一日）。

C C D (Civil Censorship Department, G H Q) の検閲実行機関の検閲は、広島「中国新聞」では厳しかったが、「佐賀新聞」など九州ではそれほどなかった。プレスコードがあっても、「佐賀新聞」は、「原子弾講演」(四五年九月三日)、「原子弾の公開反対／米の軍事視察団覚書」(二〇月三日)以下四五年九月—十二月に十数本の「原爆」報道があり、すべて検閲はフリーパスだった。言論の自由が制限されていたことは間違いない。占領軍や米国への直接批判は出てこない。放射能の晩成被害もない。とはいえ大手メディアが「自主規制」しても、雑誌や地方新聞は報道を続けた。

国際関係の中で原爆管理問題、原子力の解説や原子爆弾の仕組み、原爆被害の報道や医学的調査報告、原爆体験記・ことも向け解説も、一九四五年から多数みられる。「文藝春秋」四五年一〇月一日には「原子爆弾と斬込特攻隊」「原子爆弾雑話」とエッセイが開始される。いち早く現地に入った東大医学部都築正男前教授の「所謂原子爆弾について——特に医学の立場からの対策」は「総合医学」四五年一〇月一日に出ている。ただし検閲を受けた。「広島に於ける原子爆弾被災犠牲者」は「日本瓦斯技術協会誌」四五年一二月二五日号にある。

四五年一二月には、雑誌「科学世界」に「機関車に原子力を」、「雄鷲通信」に「原子力の工業化は前途遠達」「原子力自動車」「原子力発電機スピードトロン」が出て、戦後日本の「原子力の平和利用」へのあこがれが、本格的にスタートする。

J・ダワーの言う「長崎原爆美人コンテスト」とは？

今日広く読まれているJ・ダワー「敗北を抱きしめて」には、「厄介だったのは、日本人の占領軍への対応の仕方が例を見ないほど無邪気で、親切で、浅薄だったことである。たとえば原爆が投下された長崎においてさえ、住民は最初に到着したアメリカ人たちに贈り物を準備し、彼らを歓迎した。……住民たちは、駐留するアメリカ占領軍人とともに「ミス原爆美人コンテスト」を開催した」(岩波書店、二〇〇四年、上巻三〇五頁)とある。

「産経新聞」二〇〇五年七月三日で検証されたように、このミスコンテストは、占領軍長崎地方プレス班が主導し、「毎日新聞」、「西日本新聞」、「長崎新聞」の三紙が主催した。ただし日本側各新聞社は「ミス長崎」と表現しており(「毎日新聞」四六年五月三日)、「ミス原爆」とは米国人が内部で使った呼称だった。ダワーが問題にしたのは、「ミス原爆」の呼称のみではなく、この時期に長崎で美人コンテストで歓待しようとする日本人の占領軍への「無邪気で、親切で、浅薄」な態度、敗北の「抱きしめ」方であった。

もともと「原爆アレキサー」ところか、被爆地に「ミス原爆」が現れても不思議でないメディア状況は実在した。たとえば阪神「ダイナマイト打線」に対する巨人の「原爆打線」(「スポーツファン」四八年八月四日)といったプロ野球報道である。「桑原武夫の放った原爆」現代俳句第二芸術論(「新潟評論」四八年一月八日)、「音楽界の原子爆弾」(「月刊山陽」四九年九月)、「金融界に原子爆弾を投じた」(「西日本新聞」四九年三月七日)といった比喩的用法もある。「強力な、衝撃的、破壊的」の意で、悪い意味ではない。

3 「原子力の平和利用」は占領期から日本民衆の夢

「原子力の平和利用」は平野義太郎、仁科芳雄、武谷三男も

もともと一九四五年八月六日広島原爆投下時の米国トルーマン大統領声明には、「原子エネルギーを解放するこ

とができるという事実は、自然の力に対する人間の理解に新しい時代を迎え入れるものである。将来、原子力は、石炭、石油、降雨から得ている現在の動力を補うことができるかもしれない」と、「平和利用」の可能性が示唆されている(山根晃・立花誠彦編『資料マンハッタン計画』大月書店、一九九三年、六〇七頁)。

日本での「原爆・原子力」論議は、一九二〇年夏、モダニズム雑誌「新青年」第八号の岩下孤舟「世界の最大秘密」に始まり、「日本に居て米国の市街を灰燼に帰せしめる」原子爆弾の威力の裏面でも、「原子力家庭」の家庭電化も夢見られた。原爆被爆国となっても、原子力エネルギーそのものは「平和利用」しうるものと早くから認知されていた。ブランケ文庫のキーワード検索で「原子力の平和(的)利用」言説一七件に限定すれば、一九四六年九月の雑誌「全体医術」と、同月の仁科芳雄・横田喜三郎・岡邦雄・今野武雄による座談会「原子力時代と日本の進路」(「言論」四六年八月月号)に現れる。これもたちの世界では、「中上級」四七年二月号「科学の新知識」で使われ、前述「ども朝日」四七年一〇月号「平和に原子力、すばらしい威力を世界の幸福に利用」が続く。

学術論文としては、マルクス主義法学者の平野義太郎「戦争と平和における科学の役割」(中央公論、四八年四月号)が小見出しに用い明記した最初であるが、内容的にはもっと早くから、もつと啓蒙的なかたちで現れていた。

「自然」四六年五月仁科芳雄「日本再建と科学」は「原子爆弾の今後の發達は恐らく戦争を地球上より驅逐するに至るであらう。否、吾々は速かに戦争絶滅を實現せしめねばならぬ。然らざれば人類の退歩、文化の破滅を招来することとなるからである。原子爆弾は最も有力なる戦争抑制者といはなければならぬ」と、その威力故の「抑止力」を説く。「世界」四七年一月「原子力問題」では「原子力はむしろ徐々に發生させることの方が、爆発させることよりも易しいのであるから、利用の可能性は多分に存在する」と大鼓判を押す。

武谷三男は、マルクス主義物理学者として日本共産党、民主主義科学者協会(民科)の占領期「原子力」観に決定的ともいえる影響力を持った。「日本評論」四七年一〇月「原子力時代」などで、戦争を終結させた原子爆弾の「反

ファッショ的性格」「原子力解放の偉業」を強調した。レーニンの「共産主義ソヴェト権力プラス電化」の延長上で、先の仁科同様「原子爆弾が戦争防止の有力な契機」とし、大出力の原子力発電は利潤追求の資本主義には適さず、社会主義の計画経済で初めて可能になると説いた。後にこの「原子力時代」認識は時期尚早で、現代はなお「原水爆時代」だとして原発建設に反対するが、科学技術発展による「平和利用の可能性」を信じる、その理念的骨格は変わらなかった。つまり、当時の思想的・政治的立場、専門領域の違いを超えて、「原子力は人類を幸福にする」(雑誌根連吉、「講演」四八年一月)は、占領期日本の言論空間では共通理解だった。

「中国新聞」は検閲多いが原爆・原子力報道の宝庫

ブランケ文庫で調べると、広島「中国新聞」にも多くの「原爆」「原子爆弾」記事がある。一九四六―四八年で一六四件を抽出でき、「原爆」報道二三八五件の一割を占める。検閲が多いのが特徴で、五七%の九四件が「検閲有」である。

ところが内部に立ち入ると、検閲された多くは米ソの原爆開発競争や国連原子力管理案をめぐる外電報道で、島の地元記者たちは、一九四六年三月二五日にビキニ環礁核実験で「原子力の漏洩心配なし」(ロースス(グロウツ)少将談)を報じた外電が検閲をパスしたのを皮切りに、五月二三日「爆弾症」その後の状況はかうだ、五月一日「東大原子爆弾症診療班来廣」六月一日「原子爆弾」その後發育不良/アメリカ海軍では長崎型が「虎の子」とウラン型とプルトニウム型の違いも報じる。七月二日「數裡離れたビキニ環礁を鮮やかにキヤッチ/近いテレビ實用」は、原爆実験と並行した遠隔映像放送テレビの実用化と結びつける。

原爆投下一周年が近づくと、四六年七月二六日「強力な武器としてのみに利用されている原子爆弾を食糧増産に利用したらどうか」と提案するまでになり、八月二日「原子爆弾落ちて一年/天降る「平和の序曲」」、八月六日「日

ふぞ巡り来ぬ平和の閃光」(廣島市の爆撃こそ原子時代の誕生日/米科学者聯盟会長の談)と被爆一年を記念する。以後の「中国新聞」は、四八年五月四日「原子力の平和的利用法、偉大な発見近し」などと、他の地方新聞や雑誌と「原子力へのあこがれ」を共有する。

「原子力の平和利用」に託されたさまざまな「夢」

原子力へのあこがれは、原子力発電ばかりではなかった。自動車・機関車・船・飛行機など交通手段の動力として、「機関車も燃料いらず、平和の原子力時代来れば」(九州タイムズ)一九四六年一月二七日、「月世界・金星旅行の夢ふくらむ、今日原子力の記念日」(西日本新聞)四六年二月三日と、夢は広がる。

ラジウム療法などは戦前から知られていたから、「原子力の医学的利用」(海外旬報)四六年六月二〇日、「平和のための原子力時代来る、新ラジウム完成す、安価にできるガンの治療」(京都新聞)四八年八月八日)はもとより、「お米の原子力時代」で農業増産(「生活科学」四六年一〇月)、「農民の夢、原子力農業」(「明るい農家」四九年六月)はては「農家を悩ます颱風の道、原子力で交通整理」(「中国新聞」四六年七月二六日)と原子爆弾で台風の進路を変えることさえ夢見る。寒冷地北海道の科学普及協会「新生科学」四八年二月号は「科学の目、近く原子力暖房」という具合である。

つまり原子力は、敗戦・復興期から日本人の夢だった。それは人類史を画する新しい時代とされた。「科学の友」四九年三月号の「進歩してきた人類の文化」は、旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代と世界史を辿り、フランス革命時代・産業革命時代・大戦時代を経て、ついに「原子力時代」に到達する。

広島とともに原爆を経験した長崎でも、「平和にのびる原子力、破壊・幸福の力」建設、驚異・三〇〇倍の熱量、航空機・自動車・医療へ実用化」と原爆記念日に語られる(九州タイムズ)四九年八月九日。「平和のために闘う原子力」

は「科学画報」四九年四月にあり、「原子力は第二の火、人間は別種の動物に進化」(長崎民友)四九年一月一日と讃えられる。原子力は、「歴史を進める」主体、「文明」「進化」「進歩」の象徴となった。

労働組合も共産党もソ連原爆実験成功で「社会主義こそ平和利用」

当時の華やかな労働運動のなかでも、たとえば全通信労働組合広島郵便局支部の機関紙は「アトム」と命名され(一九四七年九月二〇日)、国鉄労働組東京鉄道教習所「国鉄通信教育」四八年二月号は「第二の火の発見、原子力時代」を「教養」欄で論じる。宇部セメント労働組合青年部の機関誌創刊号が「原爆」と名付けられたのは(四九年三月一日)、「原爆を神風にする道」(北日本新聞)四九年八月六日)が唱われた時代であるから、強力な闘争の意であろう。北越戸田労働組合の機関誌「晩星」にもコラム「原爆室」がみられ(四八年九月五日)、左翼革新勢力ほど「原爆アレルギー」にはほど遠かった。

特に一九四九年は、一月総選挙で共産党三五議席の大躍進、夏に下山・三鷹・松川事件、一〇月毛沢東の中華人民共和国建国宣言、その直前にソ連初の核実験成功が発表された。すでに志賀義雄「原子力と世界国家」(日本共産党出版部「新しい世界」四八年八月)等で「社会主義の原子力」を語っていた共産党は、「光から生まれた原子、物質がエネルギーに変わる、一億年使えるコンロ」(党出版部「大衆クラブ」四九年六月号)とボルテージをあげる。その重点が、この頃流布した共産党書記長徳田球一の「原爆パンフ」である。

「原爆パンフ」とは、「新しい世界」五〇年一月新年号に掲載された徳田球一「原子爆弾と世界恐慌を語る」という四九年一月二八日談話である。すぐに「原子爆弾と世界恐慌」(永美書房)という政治パンフレットになり、労働組合活動家やレッドパージで職を失った人々の間で広く読まれた。「なぜ資本主義社会では原子力を平和的につかえないか/なぜソ連では平和的に使えるのか/原子爆弾と共産主義/原子爆弾は最大の浪費である」と断切れ

よく「社会主義の核」の優位を説き、今日まで続く左翼版「原子力の平和利用」の原型となった。第一に荒野の開発・開墾、第二に帝国主義の核使用への「抑止力」として、いわば「原爆の平和利用」を率直に説いた。武谷三男と民科が、その理論的基礎を提供した。ちょうどスターリンの七〇歳誕生日が記念され、朝鮮戦争が画策されていた。かくして一九五〇年一月一八日の第一八回拡大中央委員会報告、いわゆる「コミンフォルム批判」を受けての日本共産党の自己批判は、冒頭「国際的規模で前進する人民勢力」で「ソ同盟における原子力の確保は、社会主義経済の偉大な発展を示すとともに、人民勢力に大きな確信をあたえ、独占資本のどうかつ政策を封殺した」「原子力を動力源として運用する範囲を拡大し、一般的につかえるような、発電源とすることができるにいたったので、もはや、おかすことのできない革命の要塞であり、物質的基礎となっている」と宣言する。直後の非合法化と党分裂により自滅していくが、「原子力の平和利用」は共産主義社会到来とほとんど同義の「見果てぬ夢」として、二一世紀まで保持される。

4 「鉄腕アトム」にも「はだしのゲン」にも通じる両義性

「原爆」「原子力」を中性化する「アトム」「ピカドン」は漫画や物語に

しかしまだ、「原爆」や「原子力」の言説世界では、「原子力戦争は人類の破壊」「週刊東洋経済」一九四九年四月二四日、「原子力と共産党員、使途は平和か武器か」「九州タイムズ」一九四九年二月二五日、「天国の裏は地獄である、我々は何れを選ぶか」「農民クラブ」一九四九年六月、「ソ連の原子爆弾で戦争の危機緩和か、原子爆弾に使われる危険」「週刊東洋経済」一九四九年一〇月一五日）など「原爆の裏面の平和利用」への留保があり、危惧もされた。占領軍GHQの検閲はあらゆる出版物に及び、原爆を落としたアメリカへの批判や広島・長崎の放射能被害の継続・晩成被害は

隠蔽された。「ソ連に原爆と殺人光線」といった記事は検閲され（『京都新聞』四八年三月二一日）、逆に「広島・長崎の原爆放射能消滅」というAP電はフリーパスである（『北日本新聞』四八年一〇月八日）。

ところが「ピカドン」「アトム」とカタカナになると、あまり抵抗感なく受け入れられたようだ。カタカナの魔力は、「ピカドン」と婦人、広島病院のお答え、不妊の心配なし、奇形児も生まれませぬ」（『中国新聞』一九四六年七月一〇日）などに使われ、「佐世保時事新聞」四八年八月二日は、原爆記念日を前に「アトムの街々」特集を組み、「広島と長崎、それは原爆の地として世界注視のうちに新しい平和を求めて起つところ、人類に原子力時代到来を願って今こそ戦後の世界復興を」と訴える。「ヒロシマ」は、『中国新聞』四六年七月から池田寿夫の連載マンガのタイトルになり、翌年、アメリカでベストセラーになった「ハーシーの同名本の翻訳から広がる」。

広島・長崎を「アトム都市」とする記事は、四七年一二月の昭和天皇広島行幸を「お待ちするアトム広島」（『九州タイムズ』四七年二月一日）、「ピカドン説明行脚、天皇がアトム広島に入られた感激の日」（『中国新聞』四七年二月二一日）のように使われる。四八年長崎原爆記念日は「祈るアトム長崎、三周年記念、誓も新たな平和建設」（『西日本新聞』四八年八月一〇日）で、爆心地は「浦上アトム公園」と命名され（『熊本日日新聞』四八年八月一〇日）、「アトム公園を花の公園に」となる（『長崎民友』四九年三月二四日）。

これがこどもたちの世界では、原子力をエネルギーとするロボットや怪物に化身する。戦前「放送された道盲状」（一九二七年）から原爆を描いてきた海野十三の連載「原子力少年」（『子供の時間』四八年九月）、「少年原子艇長」（『小学六年の学習』四九年四月）のほか、「アトム先生とボン君」（こども科学教室）四八年五月一日）、中野正治画「ゆめくらぶ：ミラクルアトム」（『漫遊少年』四八年八月二〇日）和田義三作連載マンガ「空想漫画小説 アトム島二七号」（『冒險世界』四九年一月一日）、原研児「科学冒険絵物語 アトム少年」（『少年少女探海』四九年八月一日）と、ほとんど無防備で「夢の原子力」へ一直線である。手塚治虫「鉄腕アトム」（『アトム大使』一九五一年）や映画「ゴジラ」（一九五四

年ビキニ水爆後」の出現は、時間の問題だった。

ヒロシマ「あとむ製薬」の滋養強壮薬「ピカドン」

プランケ文庫「占領期新聞・雑誌情報データベース」では、広告欄と広告文も拾われている。「愛媛新聞」一九四九年一月二三日広告に、「あとむ製薬」から「ピカドン」という薬が売り出された。調べてみると、「あとむ製薬」は四八年広島市安芸区に設立された薬種会社で、その後も社名を変えて今日まで存続している。その社史によると、「あとむ製薬」はもともと漢方薬から出発しており、「ピカドン」は新発売の滋養強壮剤だった。

しかも「ピカドン」は、中国・四国地方の専売特許ではなかった。ウェブ上の「お薬博物館」には、「あとむ製薬」とは別の富山県黒部産「かせにピカトン」という置き薬（包四〇円）が写真入りで収納されている（写真1）。富山市電子図書館にも「かせに新ピカトンM（Washima製薬所）」とあり（写真2）、奈良には「かせによくさくピカドン」の紙風船もある（写真3）。

つまり朝鮮戦争期の日本には、「ピカドン」（ピカトン）であつても包み紙から瞭然）という薬が、広島と富山から発して、当時よく見られた富山の薬売りの行面を通じて全国に流通し、家庭に入った。一九四五年に広島・長崎市民の生命を一時に奪った原爆が、五年もたたずに、日本人の健康を守り強壮にする家庭常備薬に变身する。後に人形峠でウラン鉱脈が見つかる、「ウラン風呂」から「ウラン野菜」「ウラン饅頭」まで出現する前兆である（武田徹「私たちはこうして「原爆大国」を選んだ」中公新書、二〇一二年、七二頁）。

むしろ「ピカドン」といえば、丸木位里・俊夫妻の絵本「ピカドン」が想起される。一九五〇年ポツダム書店から発行され、GHQの事後検閲で発行禁止処分にあった。今日では、「ピカドン」に原爆の悲惨や戦争の記憶をだぶらせる中沢啓治「はだしのゲン」や被爆者肥田舜太郎医師の回顧もある。ウェブ上の「ピカドン」が憎い」と

いう小谷静登の叫びは、今でも多くの人々の心を打つ。

同じヒロシマに発する、原子爆弾への二重性、一方で「ピカドン」を憎み、呪い、他方で「ピカドン」に生命力の回復を託す心性こそ、一九五四―五五年に原水爆禁止運動と「原子力の平和利用」原爆導入を同時出発させる、戦後日本の両義性の原型となる。

（注）本稿は、近く早稲田大学二〇世紀メディア研究所「インテリジェンス」第二二号（文生書院、二〇一二年三月）に掲載される「占領下日本の情報宇宙と「原爆」「原子力」——プランケ文庫のもうひとつの読み方」から、占領期メディアによる「原爆・原子力」関係記事の直接的な分析部分を抽出し、半分に短縮したものである。戦前・戦時との連続性、一〇の原爆・原発神話、プランケ文庫の概要とデータベース解析の方法、占領下言説キーワード約千個の分析、一九五〇年代へのつながり等は、「インテリジェンス」誌を参照されたい。

また、本稿の原型となった二〇一一年一〇月二〇世紀メディア研究所第六三回公開研究会報告の概要、および本稿でも一部挿入した同年二月同時代史学会年次総会報告「日本マルクス主義はなぜ「原子力」にあこがれたのか」は、筆者の報告



写真1

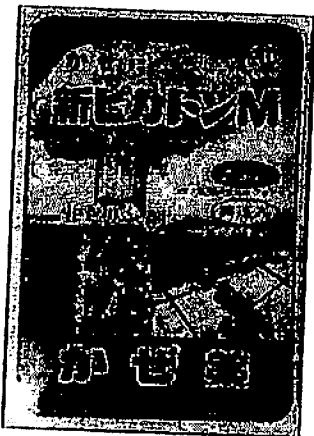


写真2



写真3

を報じた「東京新聞」一〇月二五日「メディアア観望」および「毎日新聞」十一月三日「ことばの周辺」とともに、ウェブページ「ネチズンカレッジ」(<http://www.fishu.or.jp/kaote/Homeshin/>)に収録されている。そこに掲載した基礎データ、参考文献リストとともに、併せて参照されたい。

執筆者紹介 (執筆順)

- 平川 新 東北大学災害科学国際研究所
- 保立道久 東京大学史料編纂所
- 矢田俊文 新潟大学人文学部
- 北原奈子 立命館大学歴史都市防災研究センター
- 小松 祐 熊本大学文学部
- 平田光司 総合研究大学院大学学際融合推進センター・先端科学研究科
- 有馬晋夫 早稲田大学社会学学術院
- 加藤信郎 早稲田大学客員教授・一橋大学名誉教授
- 中嶋久人 館林市史樹さん専門委員会
- 石山徳子 明治大学政治経済学部
- 奥村 弘 神戸大学大学院人文学研究科
- 岡田知弘 京都大学大学院経済学研究科
- 三宅明正 千葉大学大学院人文社会科学研究科・文学部
- 安村直己 青山学院大学文学部
- 藤野裕子 早稲田大学文学学術院
- 佐藤大介 東北大学災害科学国際研究所
- 阿部浩一 福島大学行政政策学類
- 白井晋哉 筑波大学図書館情報メディア系
- 白水 智 中央学院大学法学部
- 石井正敏 中央大学文学部
- 堀井 仁 一橋大学大学院経済学研究科修士課程

歴史学研究会 事務局
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-2
千代田三信ビル3F

震災・核災害の時代と歴史学

2012年5月30日 第1版第1刷発行

編者 歴史学研究会
 発行者 青木理人
 発行所 株式会社青木書店
 東京都千代田区神田神保町1丁目60番地
 〒101-0051
 電話 03(3219)2341 Fax03(3219)2585
 横文堂/信毎書籍印刷

©Rekishigaku Kenkyukai 2012 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN978-4-250-21206-2